

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

セル ガイド

- ① 祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ② 互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ ディポジションの分かち合いをします。
- ④ セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族のでいいのです。

- ① この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと？
- ② この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか？（または誉めたいですか？）1つだけ。
- ③ 聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか？
- ④ 互いの必要のために祈りましょう。

デーヴォ ガイド



2021.8.30-9.5

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ① お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。（2～3つ）
- ② 1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③ 礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディポジションの分かち合い（なるべく短く）
- ④ 預言の祈り（主の御心を宣言して祈り）をします。

11:12 それから、エフタはアモン人の王に使者たちを送って、言った。「あなたは私と、どうかかわりがある、私のところに攻めて来て、この国と戦おうとするのか。」

11:13 すると、アモン人の王はエフタの使者たちに答えた。「イスラエルがエジプトから上って来たとき、アルノン川からヤボク川、それにヨルダン川に至るまでの私の国を取ったからだ。だから、今、これらの地を穏やかに返してくれ。」

11:14 そこで、エフタは再びアモン人の王に使者たちを送って、

11:15 彼に、エフタはこう言うと言わせた。

「イスラエルはモアブの地も、アモン人の地も取らなかつた。

11:16 イスラエルは、エジプトから上って来たとき、荒野を通して葦の海まで行き、そこからカデシュに来た。

11:17 そこで、イスラエルはエドムの王に使者たちを送って、言った。『どうぞ、あなたの国を通らせてください。』ところが、エドムの王は聞き入れなかつた。イスラエルはモアブの王にも使者たちを送ったが、彼も好まなかつた。それでイスラエルはカデシュにとどまつた。

11:18 それから、彼らは荒野を行き、エドムの地とモアブの地を回って、モアブの地の東に来て、アルノン川の向こう側に宿営した。しかし、モアブの領土には入らなかつた。アルノンはモアブの領土だったから。

11:19 そこでイスラエルは、ヘシュボンの王で、エモリ人の王シホンに使者たちを送って、彼に言った。『どうぞ、あなたの国を通らせ

て、私の目的地に行かせてください。』

11:20 シホンはイスラエルを信用せず、その領土を通らせなかつたばかりか、シホンは民をみな集めてヤハツに陣を敷き、イスラエルと戦った。

11:21 しかし、イスラエルの神、主が、シホンとそのすべての民をイスラエルの手に渡されたので、イスラエルは彼らを打った。こうしてイスラエルはその地方に住んでいたエモリ人の全地を占領した。

11:22 こうして彼らは、アルノン川からヤボク川までと、荒野からヨルダン川までのエモリ人の全領土を占領した。

11:23 今、イスラエルの神、主は、ご自分の民イスラエルの前からエモリ人を追い払われた。それをあなたは占領しようとしている。

11:24 あなたは、あなたの神ケモシュがあなたに占領させようとする地を占領しないのか。私たちは、私たちの神、主が、私たちの前から追い払ってくださる土地をみな占領するのだ。

11:25 今、あなたはモアブの王ツィボルの子バラクよりもまさっているのか。バラクは、イスラエルと争ったことがあるのか。

11:26 イスラエルが、ヘシュボンとそれに属する村落、アロエルとそれに属する村落、アルノン川の川岸のすべての町々に、三百年間住んでいたのに、なぜあなたがたは、その期間中に、それを取り戻さなかつたのか。

11:27 私はあなたに罪を犯してはいないのに、あなたは私に戦いをいどんで、私に害を加えようとしている。審判者である主が、きょう、イスラエル人とアモン人との間を

さばいてくださるように。」

11:28 アモン人の王はエフタが彼に送ったことばを聞き入れなかつた。

モアブ人もアモン人もアブラハムのおいであるロトの末裔であろ、近くに住んでいました。どちらもイスラエルに対しては敵対的で、かつてイスラエルに対して自ら戦いをしかけ、負けてイスラエルがその結果領土を占領しました。(22)

クリスチャンが主のために生きているなら、主は勝利を与えてくださるのですから、あせって戦う必要はありません。まずはエフタのように平和のうちに解決することを求めましょう。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？



11:29 主の霊がエフタの上を下ったとき、彼はギルアデとマナセを通り、ついで、ギルアデのミツパを通して、ギルアデのミツパからアモン人のところへ進んで行った。

11:30 エフタは主に誓願を立てて言った。「もしあなたが確かにアモン人を私の手に与えてくださるなら、

11:31 私がアモン人のところから無事に帰って来たとき、私の家の戸口から私を迎えに出て来る、その者を主のものといたします。私はその者を全焼のいけにえとしてささげます。」

11:32 こうして、エフタはアモン人のところへ進んで行き、彼らと戦った。主は彼らをエフタの手に渡された。

11:33 ついでエフタは、アロエルからミニテに至るまでの二十の町を、またアベル・ケラムに至るまでで、非常に激しく打った。こうして、アモン人はイスラエル人に屈服した。

11:34 エフタが、ミツパの自分の家に来たとき、なんと、自分の娘が、タンバリンを鳴らし、踊りながら迎えに出て来ているではないか。彼女はひとり子であって、エフタには彼女のほかに、男の子も女の子もなかった。

11:35 エフタは彼女を見るや、自分の着物を引き裂いて言った。「ああ、娘よ。あなたはほんとうに、私を打ちのめしてしまった。あなたは私を苦しめる者となった。私は主に向かって口を開いたのだから、もう取り消すことはできないのだ。」

11:36 すると、娘は父に言った。「お父さま。あなたは主に対して口を開かれたのです。お口に出されたとおりのことを私にしてください。

い。主があなたのために、あなたの敵アモン人に復讐なさったのですから。」

11:37 そして、父に言った。「このことを私にさせてください。私に二か月のご猶予を下さい。私は山々をさまよひ歩き、私が処女であることを私の友だちと泣き悲しみたいたいのです。」

11:38 エフタは、「行きなさい」と言って、娘を二か月の間、出してやったので、彼女は友だちといっしょに行き、山々の上で自分の処女であることを泣き悲しんだ。

11:39 二か月の終わりに、娘は父のところへ帰って来たので、父は誓った誓願どおりに彼女におこなった。彼女はついに男を知らなかった。こうしてイスラエルでは、

11:40 毎年、イスラエルの娘たちは出て行って、年に四日間、ギルアデ人エフタの娘のために嘆きの歌を歌うことがしきたりとなった。

聖霊がエフタに臨み、彼は力を受けて進みました。そこでエフタは主に誓願を立て、人を全焼のいけにえにすると約束してしまいました。その結果彼は娘を犠牲にしてしまったのです。

聖霊の力を受けたからといって、その人が完全になるわけではありません。主に用いられても謙遜になり、早まった考えを押し通すことのないようにしなくてはなりません。

彼は娘だったので嘆きましたが、他の者であればそれで良いというものではないはずです。全焼の意味については、娘が実際に殺されたのか、または霊的な意味での全焼であって献身を意味するのははっきりとはわからないことではありませんが、いずれにしてもエフタが誓願したことは全くうかつなことでした。

そもそも神様と取引をすることは何ら信仰的ではありません。取引は対等の立場の両者がするも

のです。現代も自分の願いを聞いてもらうために、何かを断ったりさげたりするクリスチャンもいますが、むしろ主を信頼し祈って、主のみわざを待つのが信仰の姿です。人間の取引によって勝利したと言わないためです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



1日 水曜

士師記



12:1 エフライム人が集まって、ツァファンへ進んだとき、彼らはエフタに言った。

「なぜ、あなたは、あなたとともに行くように私たちに呼びかけずに、進んで行ってアモン人と戦ったのか。私たちはあなたの家をあなたもろとも火で焼き払う。」

12:2 そこでエフタは彼らに言った。「かつて、私と私の民とがアモン人と激しく争ったとき、私はあなたがたを呼び集めたが、あなたがたは私を彼らの手から救ってくれなかった。

12:3 あなたがたが私を救ってくれないことがわかったので、私は自分のいのちをかけてアモン人のところへ進んでいった。そのとき、主は彼らを私の手に渡された。なぜ、あなたがたは、きょう、私のところによって来て、私と戦おうとするのか。」

12:4 そして、エフタはギルアデの人々をみな集めて、エフライムと戦った。ギルアデの人々はエフライムを打ち破った。これはエフライムが、「ギルアデ人よ。あなたがたはエフライムとマナセのうちにいるエフライムの逃亡者だ」と言ったからである。

12:5 ギルアデ人はさらに、エフライムに面するヨルダン川の渡し場を攻め取った。エフライムの逃亡者が、「渡らせてくれ」と言うとき、ギルアデの人々はその者に、「あなたはエフライム人か」と尋ね、その者が「そうではない」と答えると、

12:6 その者に、「『シボレテ』と言え」と言い、その者が「スイボレテ」と言って、正しく発音できないと、その者をつかまえて、ヨルダン川の渡し場で殺した。そのとき、四万二千人のエフライム人が倒れた。

12:7 こうして、エフタはイスラエルを六年間、さばいた。ギルアデ人エフタは死んで、ギルアデの町に葬られた。

12:8 彼の後に、ベツレヘムの出のイブツァンがイスラエルをさばいた。

12:9 彼には三十人の息子がいた。また彼は三十人の娘を自分の氏族以外の者にとつがせ、自分の息子たちのために、よそから三十人の娘たちをめとった。彼は七年間、イスラエルをさばいた。

12:10 イブツァンは死んで、ベツレヘムに葬られた。

12:11 彼の後に、ゼブルン人エロンがイスラエルをさばいた。彼は十年間、イスラエルをさばいた。

12:12 ゼブルン人エロンは死んで、ゼブルンの地のアヤロンに葬られた。

12:13 彼の後にピルアトン人ヒレルの子アブドンがイスラエルをさばいた。

12:14 彼には四十人の息子と三十人の孫がいて、七十頭のろばに乗っていた。彼は八年間、イスラエルをさばいた。

12:15 ピルアトン人ヒレルの子アブドンは死んで、アマレク人の山地にあるエフライムの地のピルアトンに葬られた。

エフライム人は戦いに参加もしないのに、エフタをねたみ、なんくせをつけて非難しました。さらにエフライム人はギルアデ人を誹謗中傷したので、戦いとなり、その結果四万二千人ものエフライム人が死ぬ結果となりました。

”教会にも自分は働かずにかかと不平を言う人がいる”と書く註解者もいます。私たちは自戒することも必要でしょう。すべてにおいてとは言わないまでも、時にそういう態度を取ってしまうことがあるかもしれません。

その後エフタは六年間だけイスラエルをさばき、死を迎えました。彼はイスラエルに大勝利をもたらしく、また多くのことが記されています。一方イブツァンなどは記録が詳しくなく無名ではありますが、家族に恵まれていたようで、幸いな人生であったでしょう。

主が与えてくださった人生とは実に様々で、人と単純にくらべて、どちらが祝福されているとは決められないものです。主が与えてくださった使命を肯定的に受け止めて、納得と結実の人生を送りつつ、最後には「よくやった。忠実なしもべだ。」と言われたいものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



2日 木曜

士師記



13:1 イスラエル人はまた、主の目の前に悪を行ったので、主は四十年間、彼らをペリシテ人の手に渡された。

13:2 さて、ダン人の氏族で、その名をマノアというツオルアの出のひとりの人がいた。彼の妻は不妊の女で、子どもを産んだことがなかった。

13:3 主の使いがその女に現れて、彼女に言った。「見よ。あなたは不妊の女で、子どもを産まなかったが、あなたはみごもり、男の子を産む。

13:4 今、気をつけなさい。ぶどう酒や強い酒を飲んではならない。汚れた物をいっさい食べてはならない。

13:5 見よ。あなたはみごもっていて、男の子を産もうとしている。その子の頭にかみそりを当ててはならない。その子は胎内にいるときから神へのナジル人であるからだ。彼はイスラエルをペリシテ人の手から救い始める。」

13:6 その女は夫のところに行き、次のように言った。「神の人が私のところに来られました。その姿は神の使いの姿のようで、とても恐ろしくございました。私はその方がどちらから来られたか伺いませんでした。その方も私に名をお告げになりませんでした。

13:7 けれども、その方は私に言われました。『見よ。あなたはみごもっていて、男の子を産もうとしている。今、ぶどう酒や強い酒を飲んではならない。汚れた物をいっさい食べてはならない。その子は胎内にいるときから死ぬ日まで、神へのナジル人であるからだ。』」

13:8 そこで、マノアは主に願って言った。「ああ、主よ。どうぞ、あなたが遣わされたあの神の人をまた、私たちのところに来てさせてください。私たちが、生まれて来る子に、何をすればよいか、教えてください。」

13:9 神はマノアの声を聞き入れられたので、神の使いが再びこの女のところに来た。彼女は、畑にすわっており、夫マノアは彼女といっしょにいなかった。

13:10 それで、この女は走って行き、夫に告げて言った。「早く。あの日、私のところに来られたあの方が、また私に現れました。」

13:11 マノアは立ち上がって妻のあとについて行き、その方のところに行って尋ねた。「この女にお話になった方はあなたのですか。」その方は言った。「わたしだ。」

13:12 マノアは言った。「今、あなたのおことは実現するでしょう。その子のための定めとならわしはどのようにすべきでしょうか。」

13:13 すると、主の使いはマノアに言った。「わたしがこの女に言ったことすべてに気をつけなければならない。

13:14 ぶどうの木からできる物はいっさい食べてはならない。ぶどう酒や、強い酒も飲んではならない。汚れた物はいっさい食べてはならない。わたしが彼女に命じたことはみな、守らなければならない。」

イスラエルはまたしても「主の目の前に悪を行」いました。何度も同じ事を繰り返しているのですが、一向に変わりません。霊的に成長しない人はどんなに試練を経験しても、何も変わらない

ということの実例です。また次世代にかつての経験を伝える必要がありますが、それができていなかったのでしょう。

神様は御使いによって不妊の女性であるマノアの妻に、子を生むこと、胎教に気をつけるべきこと、子をナジル人として主にささげべきことを伝え、さらには夫にもそれが分かるようにされて夫婦で一致して子育てをできるように諭しました。

経験を霊的な成長、すなわち信仰のきよさと強さに変えていただきましょう。また子どもたちが主の働き人になるように、両親も教会も、主のみことばに従いつつ育てていきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたその部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



3日 金曜

士師記



13:15 マノアは主の使いに言った。「あなたにあなたをお引き止めできませんでしょうか。あなたのために子やぎを料理したいのです。」

13:16 すると、主の使いはマノアに言った。「たとい、あなたがわたしを引き止めても、わたしはあなたの食物は食べない。もし全焼のいけにえをささげたいなら、それは主にささげなさい。」マノアはその方が主の使いであることを知らなかったのである。

13:17 そこで、マノアは主の使いに言った。「お名まえは何とおっしゃるのですか。あなたのおことばが実現しましたら、私たちは、あなたをほめたたえたいのです。」

13:18 主の使いは彼に言った。「なぜ、あなたはそれを聞こうとするのか。わたしの名は不思議という。」

13:19 そこでマノアは、子やぎと穀物のささげ物を取り、それを岩の上で主にささげた。主はマノアとその妻が見ているところで、不思議なことをされた。

13:20 炎が祭壇から天に向かって上ったとき、マノアとその妻が見ているところで、主の使いは祭壇の炎の中を上って行った。彼らは地にひれ伏した。

13:21 一主の使いは再びマノアとその妻に現れなかった—そのとき、マノアは、この方が主の使いであったのを知った。

13:22 それで、マノアは妻に言った。「私たちは神を見たので、必ず死ぬだろう。」

13:23 妻は彼に言った。「もし私たちを殺そうと思われたのなら、主は私たちの手から全焼のいけにえと穀物のささげ物をお受けにな

らなかったでしょう。これらのことをみな、私たちにお示しにならなかったでしょうし、いましがた、こうしたことを私たちにお告げにならなかったでしょう。」

13:24 その後、この女は男の子を産み、その名をサムソンと呼んだ。その子は大きくなり、主は彼を祝福された。

13:25 そして、主の霊は、ツオルアとエシュタオルとの間のマハネ・ダンで彼を揺り動かし始めた。

マノアは主の使いが現れたことを悟らずに、食事を提供しようとしたが、御使いはこの世のものではないことを示唆し、また主をほめたたえべきことを語りました。

その後御使いは炎の中を天に上ってゆき、それによってマノアと妻は彼が御使いであることを悟りました。人は罪ゆえに主の前では生きられないことをマノアは知っていましたので、彼は死ななければならぬと恐れしました。しかし妻は主の御心を察して死ぬことはないと安心していました。

神様はそのご計画を人に知らせようと、様々な方法を取られます。御使いもそのひとつですが、神のことばである聖書がある今は、そのみことばが第一の方法です。日々聖書によって主と交わる人は、主のご計画を教えていただけます。

ここで大切なのはこの語り手が主の使いであって、その語られたことが主のご意思であるということです。私たちも主に語っていただくために、マノアのような恐れを持つことなく、大胆に主の前に出ましょう。

イスラエルに起こる大きな出来事や、また彼ら家族の将来を大きく変える出来事について知るためには、このように特別に主と交わり、教えていただくことが必要です。岐路に立っている人は特に主と祈りの時間を持ちましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



4日 土曜

士師記



14:1 サムソンはティムナに下って行ったとき、ペリシテ人の娘でティムナにいるひとりの女を見た。

14:2 彼は帰ったとき、父と母に告げて言った。「私はティムナで、ある女を見ました。ペリシテ人の娘です。今、あの女をめぐって、私の妻にしてください。」

14:3 すると、父と母は彼に言った。「あなたの身内の娘たちのうちに、または、私の民全体のうちに、女がひとりもないというのか。割礼を受けていないペリシテ人のうちから、妻を迎えるとは。」サムソンは父に言った。「あの女を私にもらってください。あの女が私の気に入ったのですから。」

14:4 彼の父と母は、それが主によることだとは知らなかった。主はペリシテ人と事を起こす機会を求めておられたからである。そのころはペリシテがイスラエルを支配していた。

14:5 こうして、サムソンは彼の父母とともに、ティムナに下って行き、ティムナのぶどう畑にやって来た。見よ。一頭の若い獅子がほえたけりながら彼に向かって来た。

14:6 このとき、主の霊が激しく彼のの上を下って、彼は、まるで子やぎを引き裂くように、それを引き裂いた。彼はその手に何も持っていなかった。サムソンは自分のしたことを父にも母にも言わなかった。

14:7 サムソンは下って行って、その女と話し合った。彼女はサムソンの気に入った。

14:8 しばらくたってから、サムソンは、彼女をめぐろうと引き返して来た。そして、あの獅子の死体を見ようと、わき道に入っていくと、見よ、獅子のからだの中に、蜜蜂の群れ

と蜜があった。

14:9 彼はそれを手にかき集めて、歩きながら食べた。彼は自分の父母のところに来て、それを彼らに与えたので、彼らも食べた。その蜜を、獅子のからだだからかき集めたことは彼らに言わなかった。

サムソンは異教の娘を妻にしたいと、両親の諭しを聞かずにわがままを通そうとします。娘の土地に行く途中、獅子に襲われますが、サムソンはそれと戦って殺しました。

サムソンは力の強い勇士であって、主に用いられました。信仰的にまた人格的には欠点のある人でした。もちろん信仰や人格に優れていなければ用いられないような働きもあります。しかしそうでない場合もあるのですから、主の働きを成したからといって、自分が善き人間であると誇ることなく、むしろ常に墮落の要素はあるのだと自戒する必要もあるのです。

「主の霊が激しく下って」とありますが、これは聖霊に満たされるのとは違います。「主の（みこころによって、感情の）霊が…」と理解したら良いでしょう。主は人の感情にも影響を与えられる方です。熱心さや好奇心、また恋愛感情や闘争心においても、主の御心になるようにと求めることも必要です。

獅子の死体は荒野の乾燥でミイラ化していたと思われ。主はあらゆる自然現象を用いられませんが、それをどのように生かすかは私たちの信仰と判断に委ねられる場合が多いです。日常の出来事を主のみ旨にそって用いましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



14:10 彼の父がその女のところに下って行ったとき、サムソンはそこで祝宴を催した。若い男たちはそのようにするのが常だった。

14:11 人々は、サムソンを見たとき、三十人の客を連れて来た。彼らはサムソンにつき添った。

14:12 サムソンは彼らに言った。「さあ、あなたがたに、一つのなぞをかけましょう。もし、あなたがたが七日の祝宴の間に、それを解いて、私に明かすことができれば、あなたがたに亜麻布の着物三十着と、晴れ着三十着をあげましょう。

14:13 もし、それを私に明かすことができなければ、あなたがたが亜麻布の着物三十着と晴れ着三十着とを私に下さい。」すると、彼らは言った。「あなたのなぞをかけて、私たちに聞かせてください。」

14:14 そこで、サムソンは彼らに言った。「食らうものから食べ物が出、強いものから甘いものが出た。」彼らは三日たっても、そのなぞを明かすことができなかった。

14:15 四日目になって、彼らはサムソンの妻に言った。「あなたの夫をくどいて、あのなぞを私たちに明かしてください。さもないと、私たちはあなたとあなたの父の家とを焼き払ってしまう。あなたがたは私たちからはぎ取るために招待したのですか。そうではないでしょう。」

14:16 そこで、サムソンの妻は夫に泣きすがって言った。「あなたは私を憎んでばかりいて、私を愛してくださいませぬ。あなたは私の民の人々に、なぞをかけて、それを私に解いてくださいませぬ。」すると、サムソン

は彼女に言った。「ご覧。私は父にも母にもそれを明かしてはいない。あなたに、明かさなければならないのか。」

14:17 彼女は祝宴の続いていた七日間、サムソンに泣きすがった。七日目になって、彼女がしきりにせがんだので、サムソンは彼女に明かした。それで、彼女はそのなぞを自分の民の人々に明かした。

14:18 町の人々は、七日目の日が沈む前にサムソンに言った。「蜂蜜よりも甘いものは何か。雄獅子よりも強いものは何か。」すると、サムソンは彼らに言った。「もし、私の雌の子牛で耕さなかったなら、私のなぞは解けなかったろうに。」

14:19 そのとき、主の霊が激しくサムソンの上に下った。彼はアシュケロンに下って行って、そこ住民三十人を打ち殺し、彼らからはぎ取って、なぞを明かした者たちにその晴れ着をやり、彼は怒りを燃やして、父の家に帰った。

14:20 それで、サムソンの妻は、彼につき添った客のひとりの妻となった。

サムソンは自分の楽しみのためになぞかけをしました。それに乗ったペリシテの若者たちは、サムソンの妻をそそのかして、なぞかけに勝とうとしますが、サムソンはそれに感づいてペリシテの若者たちを殺してしまいました。

ここではサムソンの人格の幼稚さが表れています。友好関係を築くべき人を遊興の道具にし、物を取ろうとします。女性には弱いという面をさらして自分で答えを言っておきながら、自分が損をするとなると、約束を果たすどころか相手を殺してしまいます。

「(主の)霊」とは原語ではルーアツハというこばで、息や風また感情などをも表します。で

すから主の許可のもとでサムソンが感情のままにふるまうようにされたということでしょう。神であられる聖霊様に満たされたわけはありません。

ここで気付くことは誰一人として正しい者も信仰ある者もないということです。人は弱い存在なので互いに信仰的影響を与え合わない、このサムソンのように回復の手立てがない世界に陥ってしまうのです。彼の間違いは異教から妻をめとるところから始まりました。「不信者とつり合わぬくびき」を負って、信仰が損なわれぬように警戒しましょう。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？

